

セッション

野蛮、啓蒙と経済学の形成

21 世紀に入り、日本は長期の不況に喘いでいたが、アベノ・ミックスで景気が上昇しつつあるのが、2013 年 3 月の状況である。宮澤財政が債務累積だけをもたらし、その後の規制改革の結果甚だしくなった格差社会化に加えて、東日本大震災もあり、製造業も苦境に陥っていた。円安基調が続くようになって、明るい兆しが見えてきたが、TPP への参加が不安を引き起こしている。

一方、万博とオリンピックを経験した中国は今や未曾有の経済発展に沸き立ち、リニアモーター新幹線の営業も実現した。しかし北京の空気汚染は凄まじいし、PM2.5 は黄砂と共に自本を悩ませている。いずれにせよ両国とも、「野蛮」を克服できていないのは確かである。

金融秩序は強欲によって繰り返し踏みにじられ破壊されて民富が奪われる。日本の野蛮は様々な弱者切り捨てに見られ、中国の野蛮は強権政治と腐敗に象徴されているだろう。両国ともに格差拡大を伴っている。これは「文明化のなかの野蛮」である。

野蛮の克服を目指して生まれた文明社会は、完全に野蛮を克服することなく、変動し続けるのが運命なのだろうか。フォルトゥナとの戦いは終焉することはない。今なお経済学は「よりよい社会」の形成に寄与するにはどうすればよいのかという大きな課題に直面している。このセッションでは、経済学の現代的課題を見据えつつ、野蛮に挑戦した経済学の形成時代の思想家たちの様々な経験を顧みることによって、この困難な課題に関して認識を深めたいと考える。

改めて述べるまでもないが、18 世紀英米とヨーロッパ大陸の啓蒙思想とそこでの新しい学問としての経済学 (Political Economy) の形成とは密接不可分の関係があった。啓蒙はポーコックの言うように多様であり (Pocock, *Virtue, Commerce, and History*, 1985)、様々な啓蒙のプロジェクトがあったが、しかしロバートスンが言うように (John Robertson, *The Case for Enlightenment*, 2005)、本格的な啓蒙には経済学の形成ないし導入が伴っていたとも言う。ただし、ロバートスンは、経済学はスコットランド啓蒙とナポリ啓蒙だけが確立できたに過ぎないという極論に陥った。

18 世紀に経済学形成を推進したのは、特にスコットランド、フランス、イタリアであり、イングランド、アメリカ、アイルランド、ドイツ (日本も?) などでもその萌芽は存在したものの、未だ主要な学問分野にはならなかった。それは啓蒙思想として活力を誇った程度に比例しているように思われる。

すなわち、市民革命を経験したか、文明化を推し進めた地域や国では、いまだ下層階級は貧困ではあったが、しかし、国民、民衆の安定した生活、豊かさの実現が課題となっており、有徳で豊かで幸福な生活を、いかにすれば実現できるのか、国民や市民はどのような行動と道徳を実践すべきかということが、社会の課題として意識されるように

なり、熱心な論争、公論が巻き起こっていた。それは言い換えれば後進性の克服であり、「野蛮」の克服でもあった。

野蛮とは何か。野蛮は様々な形を取って存在した。それは有無を言わせぬ暴力であり、一方的な支配であり、隣人愛や友愛の否定であった。専制政治もまた野蛮であった。封建的暴政もそうである。文明化はエリ阿斯がたどったように容易に定着しなかったのである。さらに文明化自体も新たな野蛮を生み出した。文明化に巻き込まれて伝統社会は無残に解体されていったことを歴史は示している。文明化のなかでのひそかな野蛮もあれば、公海では公然たる野蛮としての掠奪がまかり通っていた。こうして啓蒙思想家のあいだの論争は、法的な議論に留まらず、政治論・政策論であり、文明社会論であり、経済論であった。宗教も強欲と腐敗に流されやすい感情の抑制を求めた。人間本性が真剣な分析対象となった。

スコットランドとイタリアでは大学の道德哲学や法学の教授が経済学を新しい学問分野として樹立する（アダム・スミスとジェノヴェージ）が、フランスでは貴族知識人や為政者たちがこの学問の担い手であった（モンテスキュー、ケネー、チュルゴなど）。アメリカではフランクリン、ウィザスプーン、アレグザンダー・ハミルトンなどが政策に関与しながらこの新しい学問の形成に寄与した。

近代化、文明化の先進国イングランドでは17世紀にペティ、ハリントン、テンプル、ロックなどが、重商主義的ながら先駆的な経済認識をもたらしたものの、18世紀にはオックスフォード大学とケンブリッジ大学の学問が沈滞していたことも手伝って、経済学の形成は進まなかった。ダヴナント、デフォー、マンデヴィルやタッカー、リチャード・プライスといった商人、ジャーナリスト、開業医、国教会牧師、非国教徒がイングランドで経済思想を継承発展させたが、学問的な体系化は遅れた。それは逆にイングランドの文明化が進んでいたことと関係があるのかもしれない。

18世紀の英米、ヨーロッパ、アジアを広く視野に置きながら、このセッションでは数名が分担報告を行ない、ダイナミックな知の競演を試みたいと思っている。

企画者（代表者、組織者） 田中秀夫

報告者1 後藤浩子「有用性と野蛮」

報告者2 野原慎司「チュルゴにおける野蛮と文明」

報告者3 米田昇平「J・F・ムロンの商業社会論——啓蒙の経済学」

討論者 生越利昭、奥田敬